

転成名詞分類再考の指標を巡って：
「動作・作用のありさまなど」を表す3群(36語)から

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-01-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 中尾, 桂子 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6613

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



転成名詞分類再考の指標を巡って

—「動作・作用のありさまなど」を表す3群(36語)から—

中尾 桂子

転成名詞分類再考の指標を巡って

概要

中尾(2017)で問題提起した課題(動詞が品詞転成して名詞になった転成名詞は、意味分類に応じて統語上も共通する観点が見られるのか)の再検討結果を報告する。西尾(1961)に準じる松村(2003)の転成名詞の意味類型で「動作・作用など」に分類されている〈a.動作・作用そのもの(～スルコト)〉,〈b.動作・作用の内容〉,〈c.動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど〉の3群の転成名詞,計36語を,その使用形態別使用頻度を指標にクラスター分析,因子分析,対応分析など量的な観点から探索的に分析し,使用形態と意味上の分類の関連性を見た。結果,意味上,異なるカテゴリでの統語上の振る舞いに,ある種のカテゴリ特性と認められるものがあると考えられた。その特性には典型性において連続性が認められる場合,あるいは,カテゴリを超えた共通性に起因する場合があったが,分析対象数を増やしても,中尾(2017)で指摘した意味分類上の枠組みと使用形態の頻度との関連性が追認されたと言えるだろう。

キーワード

転成名詞, クラスター分析, 因子分析, 対応分析, 日本語初中級学習者

1. はじめに

例えば,動詞,「眺める」から派生した名詞,「眺め」は,元の動詞の連用形が名詞に品詞転成したものである。サ変動詞の語幹となる「動作性名詞」とは若干異なる性質のため,「転成名詞」や「動詞連用形名詞」などと呼ばれるが,

本稿では転成したことに焦点を当て、転成名詞と呼んでおく。

この転成名詞の割合は動詞の30～40%である（金2003）。また、転成後も、意味や、使用方法において、完全に名詞として振る舞うわけではなく、複合化されにくいなどの構文上制限が見られるものも多い（西尾，1961）。名詞性がどのように現れるか、構文上の傾向がどの程度一般化が可能か、依然、構造上も意味上も、分析、整理が十分ではなく、使用上の特性の一般化を行うには分析や現象の記述が十分に行われているとは言えない状態にある。

特に、母語が動詞述語文中心の言語話者である初中級の日本語学習者の作文では、動詞述語文の格構造の中で、不完全な意味や構成要素が補足されることなく使用することでの誤用が多い（例（1）、（2）ともに、誤記等も含んで表記は原文のまま）。

(1) きれいな海とながめがあります。（スペイン人学習者の自由作文「私の町」に現れた誤用例）

(2) 途中、日が昇り、ツバメなどの鳥類が海の水面を飛び交う時、すっかり優美なながめを与えました。（寺村1990よりマレーシア人学習者の自由作文に現れた「慣用的な動詞句」の誤用例）

しかし、現時点では分析や整理が十分に進んでおらず、日本語学習者の転成名詞の誤用への対応は、誤用である理由の説明が抽象的にならざるを得ないため、再度の誤用を回避するための手当はなされずに、誤用の都度、慣用的な語彙だから一つずつ覚えればよいと説明されることが多い。誤用を繰り返さず、日本語学習者にわかりやすく説明するには、転成名詞の不完全性と守備範囲、存在理由を教師側がより明確に意識していく必要がある。また、転成名詞に関する誤用を防ぐ指導のためには、使用形態上の傾向を、少しずつでも、ある程度見渡せるような手がかりを出しておきたい。

本稿では、松村（2003）が西尾（1961）の意味分類を整理して再編纂した転成名詞のうち、意味分野「動作・作用など」の中の〈a.動作・作用そのもの

(～スルコト)〉, 〈b. 動作・作用の内容〉, 〈c. 動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど〉の計36語に対して, なんらかの傾向が見いだせるかを念頭に, 中尾(2017)で用いた統計的手法で分析を継続する。

量的分析として, まず, 対象全語を変数に, 文中でのその語の前後1語をケースとしてクラスター分析を行い, 判別分析を経て, コレスポネンス分析でその対応関係の内容を見る。さらに, 特徴的な振る舞いが見られるケース(形態)における回帰分析を行う。使用上の形態として, 分析対象語の前後1語の形式を利用するのは, 形態数が多く極力簡潔に構文をみるためである。これは, 意味分野別に, 連体修飾節を構成する成分や述部の構成要素といった, 使用上の形態で分けられるか, または, 傾向があるかを探る方法として採用したものであるが, 統語上の形態という観点から, 転成名詞の特徴について考える手がかりを得ることが目的である。なお, 今回は, 後述のように中尾(2017)とは調査対象の準備方法を変更する。

2. 先行研究

転成名詞は, 全ての動詞で見られる現象ではないが, 特殊なものとして無視できるほど希少な現象ではない(金2003)。また, 名詞, 動詞という品詞分類上, 名詞と動詞の連続した位置づけの範疇の問題であることから, これまで, 言語学や国語学の観点から多くの分析がなされ, 語構成や統語上の形態的な特徴, 意味, 用法で転成名詞の分類がなされてきた。その初期の研究としては, 山田(1936)や西尾(1961)があるが, これらは, 形態上の特徴で分けた後, 意味上の特徴で分類している。これら初期の考察をベースに, いくつかの方向に別れて分析が進められ, 複合語の問題として(山田1963, 奥津1974, 村木1981, 加藤1987), また, 結果解釈の観点(八木2012)から, さらに, プロトタイプの観点(岡村1995)や, 意味上の特徴で細分化(山本1991, 松村2013)などと研究が進められている。

この転成名詞の初期の研究である西尾(1961)は, 連体修飾語を取りえるかどうかを転成名詞か否かの判定に利用している。

「(試験を) 受けに行く (来る)・受けは (も・さえ等) する (しない)・お受けになる」などの〈受け〉のような用法は、連用修飾語をとることができ、多くの動詞に普遍的にみられる、動詞と名詞の両性質を有する用法であって、これらは未だ連用形名詞とは考えない。〈中略〉「彼は(友人間の) 受けがよい」の〈受け〉のような場合には、すでに連体修飾をとり得るから、名詞に転じたものとして、連用形名詞の範囲に含まれる。(西尾1961)

西尾 (1961) は、語構成上の成り立ち方 (形式) に基づいて、大きく、1, 2に分け、ついで、「い」「ろ」以下に分類した。

1. 動詞連用形だけで成り立っている名詞

い. 連用形一つで成り立っているもの

(遊び, 扱い, 救いなど) ----- (A)

ろ. 連用形二つ (以上) で成り立っているもの

(受入れ, 請負, 組立てなど) ----- (B)

(売れ行き, 飛び読み, 切り売りなど) --- (C)

(売り買い, 貸し借り, 上げ下げなど) --- (D)

2. 動詞連用形を含んでいる名詞

い. 下位成文として

(雪どけ, 火入れ, ねじ廻しなど) ----- (E)

ろ. 上 (中) 位成文として

(干し草, 届け先, 飛び地など) ----- (F)

4 　ただ、この分類は、転成名詞にのみ焦点を当て、さらに、名詞であることを前提とした考察であることから、定義の際に基準とした「動作性」の位置づけが見えにくい。

一方で、西尾 (1961:○) は、語構成上の成り立ちに加えて、宮島 (1956) に重なるとしながらも、「動詞の意味が名詞化される、され方についてその諸

類型」を次のように考えている。

1. 動作・作用など
 - イ 動作・作用そのもの〔何々スルコト〕泳ぎ、調べ、貸し出し
 - ロ 動作・作用の内容〔何々スルトコロノコトガラ〕考え、教え、望み
 - ハ 動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど滑り(がよい)、すわり(が悪い)
2. 動作・作用の所産・結果〔何々シタモノ〕
 - イ 他動詞から〔何カヲ何々シタ結果デキタモノ〕包み、貯え、綴じ込み、割り当て
 - ロ 自動詞から〔何カガ何々シタ結果デキタモノ〕余り、固まり、氷、くぼみ
3. 動作・作用の主体〔何々スルモノ・人。ソレ(ソノ人)ガ何々スル〕
 - イ 人をあらわす〔何々スルモノ(コトヲ業トスル)人〕、見習い、手伝い、付き添い、
 - ロ 人以外〔何々スルモノ〕流れ、妨げ、支え、
4. 動作・作用の客体〔何々スルモノ・人。ソレ(ソノ人)ヲ何々スル〕
つまみ、差し入れ、手提げ
5. 動作・作用の手段〔何々スルタメノモノ。ソレデ何々スル〕はかり、はたき、カン切り
6. 動作・作用に向けられる目標〔何々スル(タメノ)モノ。ソレニ何々スル〕こぼし、糸巻き
7. 動作・作用の行なわれる場所〔何々スルトコロ〕通り、(地の)果て、受付
8. 動作・作用の行なわれる時間〔何々スルトキ〕暮れ、終わり、夜明け

この西尾(1961)の意味での分類が、その後の転成名詞の研究の発展基盤となっているのだが、こちらも、意味上の分類であり、語彙としての表現される

内容での分類に偏り、構文上の手がかりを得られるものとは言いにくい。また、「使用上の形態」といった統語上の注意点を整理する観点から見ると、分類整理の結果から得られる示唆や情報量が少ない。名詞としての機能の確認ではなく、たとえば、修飾語と共起したユニットを形成するものか、それとも、動詞文の中で単独の成分として使用できるのか、または、「です」「だ」などと合わさった叙述文での使用が多いのか。さらに、その頻度から考えて、使用上の形態について注意すべきか、暫定的に慣用句として覚えておけばいいという対処で済ませられるものかなどといった教育的観点を補佐する情報が望ましい。特に日本語初中級学習者の作文指導時に役立ちそうな観点を得ることを考えれば、文中で使用する際の形態的な特徴での共通点を確認したい。

西尾（1961）のこの分類の中には、現在の視点で見ると、人道上、問題がある例や、もはや使用されないと考えられる語も多い。本稿では、基本的に西尾の分類基準に従うものの、8類型の西尾（1961）を7類型に修正して、用例を再検討した松村（2003）の意味分類と語彙リスト（巻末資料）を分析対象として利用する。

3. リサーチデザイン（RQ）

3.1 研究目的とRQ

先行研究での転成名詞の意味分類は多いが、作文指導において必要になる「使用上の形態」といった統語上の注意点を整理する観点から見ると、先行研究からの示唆が少ない。中尾（2017）は、意味と形態との関連性を調べるために、まず、転成名詞の性質が名詞よりなのか動詞よりなのか調べた。結果、動詞連用形が転成名詞として使用される場合、名詞として使用されることが多い語か、動詞連用形の使用の方が多い語かには、質的な違いがあること、ならびに、人によってその捉え方に差があると考えられた（中尾2017）。しかし、名詞としての性質上の安定が、即、転成名詞の使用の制限に関連するかはわからなかつた。その一方で、「動作、作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど」に分類される語のように、特定の分類内の全ての語が、動詞で利用される場合が有意に多いものがあるなど、転成名詞を意味分野という単位で見ても、

動詞使用か名詞使用かの頻度には、なんらかの傾向がありそうな分野があった(中尾2017)。そのため、中尾(2017)では、同分類の使用頻度の多い5語「暮らし」、「構え」、「出来」、「当たり」、「育ち」における転成名詞と形態との関係をクラスター分析、ならびに、コレスポネンス分析等で相対的に比較した。その結果、クラスター分析、コレスポネンス分析、重回帰分析でも、分野に共通する使用形態、ならびに、語ごとの特徴的な使用形態がうかがえたことから、意味的な分類と形態的な特徴とに関連性がうかがえた。

また、使用形態から見た場合、よく似た使用形態の語と、使用形態が異なる語とがあると考えられたが、それがグループ間でも見られるかを検証していかなければならない。引き続き、本稿でも、同一分野内の別グループ間の関係を比較し、転成名詞の意味分類と形態の関係について検証する。

本稿では、松村(2003)の分類のうち、大分類「1. 動作・作用など」の中の〈a. 動作・作用そのもの(～スルコト)〉、〈b. 動作・作用の内容〉、〈c. 動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど〉の3つのグループ内の36語に対して、なんらかの傾向が見いだせるかを念頭に、中尾(2017)の分析を継続する。本稿でのRQは、安定性の低い転成名詞にも、使用頻度、意味分類、使用形態に、関連性、共通点があるかということである。

3.2 データ

『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版』(BCCWJ-NT)から「中納言」を経て、松村(2003)のリストの「1. 動作・作用など」a, b, cの36語をキーとして検索した結果を利用する。BCCWJ(単にBCCWJとする場合は全てBCWJ-NTのことである)は、空白・記号・補助記号を除いた検索対象語数が104,911,460語である。今回の全ての検索結果で得られる用例数は、BCCWJの検索対象語104,911,460語、すなわち、1億語あたりの頻度となるため、そのまま、調整せずに比較する。

「中納言」での検索キーを表1右列にあげる。表1の左列は意味分野の別であるが、項目名としては長いため、統計処理の際は、それぞれ、aは★、bは●、cは▽と、記号で区別した。

表1：大分類「1. 動作・作用など」の検索キーとなる語

下位の意味分野	検索キー (36語)
a. 動作・作用★	泳ぎ, 釣り, 笑い, 覗き, 揺れ, 守り, 脅し, 囁き, しくじり, 引っ手繰り, 取り調べ, 貸し出し, 貸し切り, 繰り上げ, 乗り換え (15語)
b. 動作・作用内容●	考え, 教え, 読み, 話 (バナシ163は含まず), 語り (カタリ・ガタリ両合算), 望み, 楽しみ, 企み, 願い, 悩み, 祈り, 勤め (12語)
c. 動作・作用様子▽	暮らし, 構え, 育ち, 成り立ち, 付き, 滑り, 座り, 出来, 当たり (9語)

なお、今回検索した36語では、読み方が清音、濁音両方あったとしても（例：「語り」のヨミ「カタリ」「ガタリ」など）、清濁音は区別せずに同じ語として合算している。前回の中尾（2017）では清濁音の量の多さによって、別の語と考えたものもあったが、区別する場合と区別しない場合の線引きが不明瞭であったため、今回は、転成名詞の前の1語が名詞である場合を明確にして検索しなおし、清濁音の区別は一切せずに、どちらも本稿での考察対象に含めた。

また、指標にする転成名詞の文中での使用形態については、日本語初中級学習者の既習の文法知識でも、その統語上の振る舞いが形態から予測されるものとする。文中での使用形態は、その統語上、大きく三つ、すなわち、転成名詞が被修飾語になる場合、転成名詞が格構造の中の1成分である場合、述語を構成する要素である場合とに分けられるが、単に前後1語の形態的な特徴で見ると、それぞれ次のようなものに相当すると推測された。たとえば、転成名詞が、格構造の中の1成分となっている場合、転成名詞の直前、直後に、格構造の指標である格助詞や係り助詞が来ることが多いと考えられる。さらに、述語を構成する要素となっている場合は、⁸ コピュラ文の指標、いわゆる助動詞相当語句が直後に来ることが多い。また、直後、すなわち、すぐ右側に、句読点や、BCCWJで文の切れ目を表す「#」がある場合は、言い切りとして、単独の1語文相当を含み、コピュラ文のカテゴリーに分けられる。

連体修飾語句（節）を受ける場合は、文中で転成名詞の直前、つまり、転成名詞のすぐ左側にある語が連体助詞「の」、イ形容詞、ナ形容詞、動詞であるか、を見れば、転成名詞の前の構文上の環境が推測できる。また、直前に他の名詞があり、転成名詞が直後に続く場合は、複合名詞だと考えられる。さらに、左側直前に連体詞があり、転成名詞が続く場合は単に1語と考えてもよいだろう。転成名詞の直前左側に接頭辞がついて1語となる場合も、左側直前という点では連体詞の接続等と同じ形態になり、単独の1語と扱う。

なお、BCCWJでは、動詞の「連用形」として利用されている用例のうち、名詞以外の語句と結びついて慣用句の構成要素となっているものがあつた。たとえば、「入り」が「お」「気」「に」と複合化して、または、「気に入りに」「お」がつく形で、「お気に入りに」、さらに、「気に入りに」という転成名詞なのか複合化した慣用句なのか判断がつきにくい形を形成するものである。例にあげた「気に入りに」の用例をBCCWJで検索してみると、162例あつたが、今回は、名詞の複合語を直前直後の1語と転成名詞で構成するものとして数えるため、今回の検索対象35語の中に、この「気に入りに」同様のものがあつた場合は、全て、名詞認定の誤用数には入れず、複合語した1語の転成名詞と捉えた。

このような慣用表現や、より明確な使用形態を見出すためには、少なくとも、直前直後の2、3語までは見た方がいいという考え方もあるが、1語を見ることでも、転成名詞を取り巻く文中のごく基本的な形態的環境が予測できることから、初級日本語学習者の文法知識で判断できる単純な形式に留めることにして、今回も、直前、直後の1語のみの形式に着目するだけとしておく。

以上の転成名詞の文中での振る舞い（連体修飾時の形や格構造中での使用方法、述語かどうかなど）を推測的に判断する使用上の形態を27タイプとし、表2にまとめる。

3.3 分析方法

3.3.1 データの事前処理

『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（BCCWJ）から「中納言」を経て、表1で挙げた検索語を検索するが、その前後1語ずつの形態を表2のとおり、27

表2 使用形態を判断する指標 (変数)

直前の形	の ない V-る V-た 連体詞 が を に 係り助詞はも で と や 接頭辞 他名詞と複合化	直後の形	の が に を で 係り助詞はも へ や から だけ, さえ等の副助詞 コピュラ, 言い切り, 単独文 他名詞と複合化
------	--	------	--

種別に条件指定して、使用頻度を計上していく。BCCWJでの転成名詞は、基本的に、品詞の大分類が「名詞」として登録されているが、松村（2003）の83語の中には、BCCWJ上で「動詞」として登録されている転成名詞もある。その誤登録は中尾（2017）で考察したため、今回の検索では考慮せず、「語義素」として転成名詞の見出しを指定する際、「品詞」は「名詞」のみを対象とした。例えば、「泳ぎ」の場合、「語義素」を「泳ぎ」、品詞（大分類）を「名詞」、さらに、発音形出現形を「オヨギ」で指定して、その語の後に続く品詞を「助詞」と指定し、その前後1語ずつを表2の27種毎に検索して、使用頻度数を記録するというものである。

前回、中尾（2017）では、「キー」列の前後の共起関係を見て頻度を数えるのに、BCCWJの検索結果を、さらにAntConcを用いて対象語をソート、取捨選択、カウントしたが、「中納言」との併用による時間的コストと工程の複雑さによるミスを回避するために、時間はかかるが、該当する語の数が明確になるまで、BCCWJ上での検索を複数回行い、すべての工程を「中納言」上で行って、目視での検索結果の再整理はしなかった。

3.3.2 分析の手法と指標

転成名詞の意味上の分類観点と形態との関連性（RQ）を見るために、どの統計手法が望ましいかは一概に決められない。そこで、転成名詞の文中での使用上の形態と、意味分類を使用頻度での関連づけるため、統計的手法を用いて、複数の変数間の関係から、変数の共通性や独自性を確認する。また、転成名詞の用例グループの中に、形態的な特徴が、そのグループにカテゴライズされる要因として関係しているか見るため、転成名詞の前後の形態を変数とし、語をケースとして、表1の指標に基づき、表2の頻度表に整理した後、探索的な統計的分析を行う。

統計的手法として、転成名詞をケースとして、また、文中での使用形態を変数として、クラスター分析、判別分析、コレスポネンス分析、因子分析を順に実施し、両者の傾向的な関係から、意味的なグループ分けについて考察する手がかりを得ようと考えたことによる。

まず、変数全体をクラスター分析するが、それは、ケースである転成名詞と、変数との関係の中に埋もれているデータ自体が持つ情報を手掛かりに、類似するものの有無を概観するためである。クラスター分析にあたっては、データとした使用頻度数が0から1000までと差が大きいことから、個体間非類似度計算法を平方標準化ユークリッド距離で、また、クラスター構成法をワード法にして分析した。平方標準化ユークリッド距離にしたのは、個体間の類似度をその粗品度から自動標準化して計算するためであり、ワード法にしたのは、意味的な類似性と形態的類似性の関連性が不明なため、念のために鎖効果の回避を考えた。ついで、個々の転成名詞が所属するグループ間の相違を明確にするために、3群以上の関係を数学的に自動判定する判別分析（正準判別法）を行い、多重散布図を得ることで、視覚的に群間関係を見つめる。また、コレスポネンス分析にてケースと変数の関係を直感的に見ることで、両者の関係の全体像を掴む。さらに、因子分析により、転成名詞の共通性や独自性を推定する。クラスター分析にはCollegeAnalysisVer.5.0を利用し、因子分析にはExcel©のアドインを利用する。

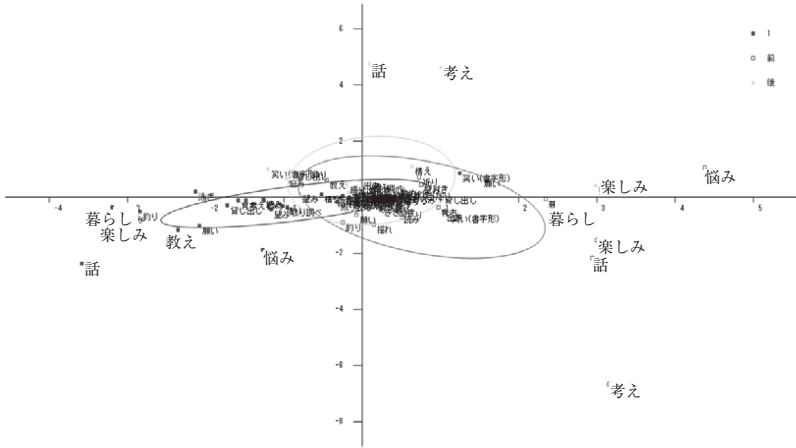


図3：意味グループ（3群）で判別分析の結果図

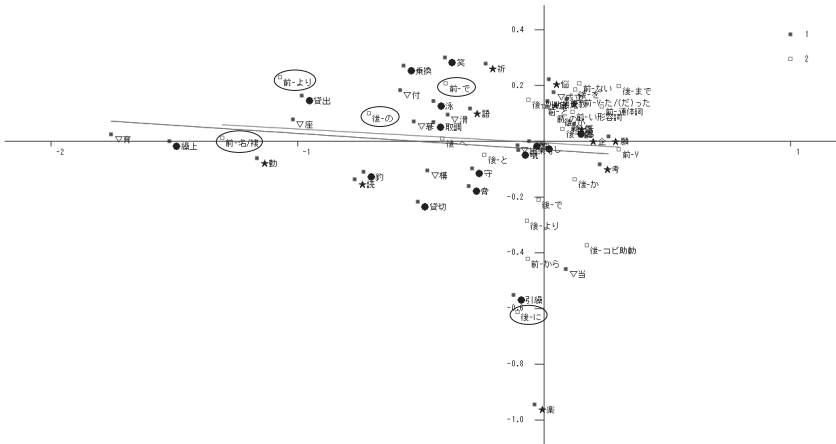


図4：転成名詞と前後1語の形態との対応関係（36語）

そこで、図2の7語を踏まえ、これらの語と前後1語の形態との対応関係（コレスポネンス分析：図4）を見ると、たとえば、「引っ操り」は後続する「に」という形態において、また、「貸し出し」はその前の「より」により、図

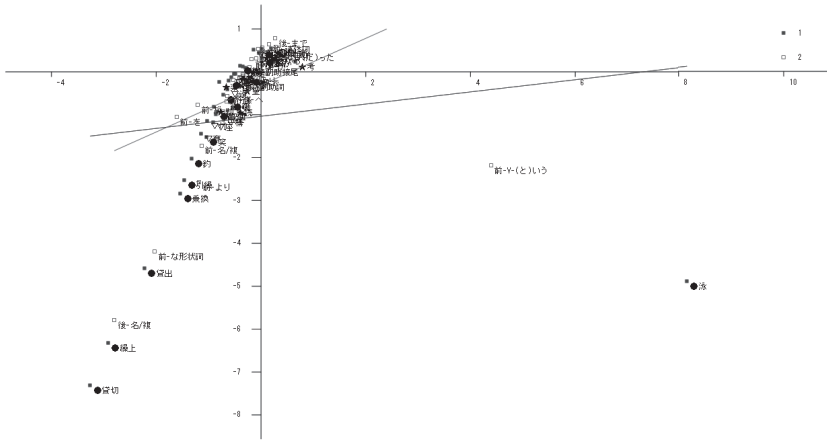


図5：転成名詞と前後1語の形態との対応関係（30語）

3の右上の面に集中する多くの転成名詞とは異なる構文をとる傾向にあるのではないかと推察される。

図4の右上のディメンションに集中する転成名詞を、仮にプロトタイプとみれば、語と形式との対応関係におけるプロトタイプより遠くである別のディメンションに位置するものは、プロトタイプとは異なる、独自要素の形式的要素により規定される語だと考えられる。ただし、データとしては外れ値の語であることから、統計的分析ではプロトタイプの性質をよく見るために、周辺に離れて出てくる語は除外することがあるため、ここでも、プロトタイプのディメンションから最も遠くに見られる5語を減らしてみた（図5）。関係の低そうな語を削除した分析結果を表した図5を見ると、転成名詞の1語前が別の名詞、すなわち、2語で名詞句を作る場合や、1語前が形容詞で連体修飾句を作る場合など、名詞句の構成要素として使用される形態のものが、プロトタイプかそうではないかの要因となっている可能性が伺えた。

14

また、独自性要因を持つ語、すなわち、外れ値の語として考えられそうな語を見るのに、変数どうしの共通性や独自性を見るための因子分析を行い、共通する変数グループ間を区別する手がかりを考えてみた。X=因子1、Y=因子2

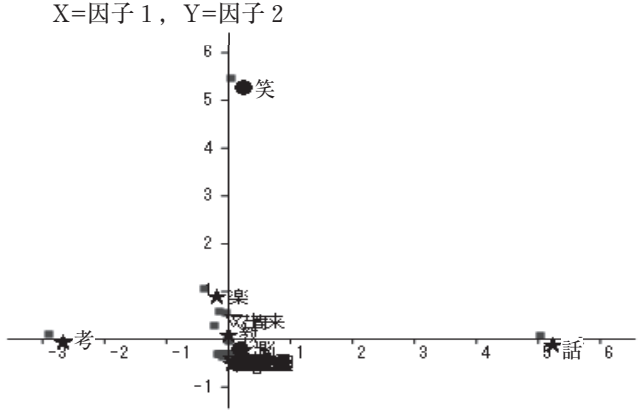


図 6：因子分析結果図 (X=因子 1, Y=因子 2)

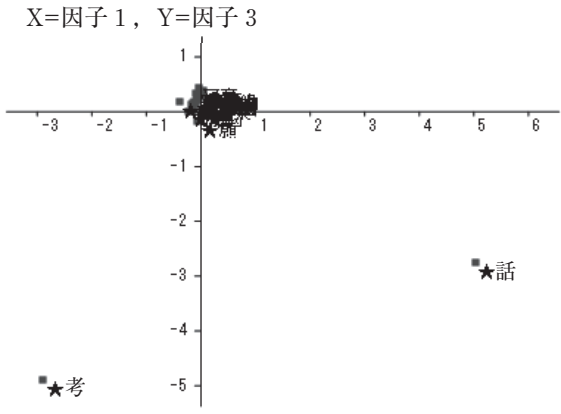


図 7：因子分析結果図 (X=因子 1, Y=因子 3)

の図 6 からは11語の共通因子を持つ語が考えられた。〈b. 動作・作用内容〉の「話」, 「考え」, 「楽しみ」, (教え, 願い), 〈a. 動作・作用〉の「笑い」, (オヨギ, 悩み), 〈c. 動作・作用様子〉の「育ち」, 「出来」, 「暮らし」である。最初に行ったクラスター分析の結果, 多くの転成名詞とは異なり, 特異性があると考えられた語が多く該当しているので, 区別のためにクラスター分析の結果で

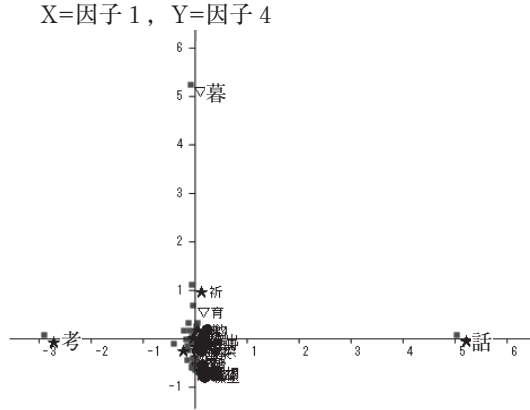


図 8：因子分析結果図（X=因子 1，Y=因子 4）

も他と分けられていた語には下線をつけている。

また、X=因子 1，Y=因子 3 の図 7 から、最初に行ったクラスター分析の結果、多くの転成名詞とは異なり、特異性があると考えられた〈b. 動作・作用内容〉の「考え」，「話」の独自性が伺える。

図 8 からは、〈b. 動作・作用内容〉の「話」，「考え」，「祈り」，〈c. 動作・作用様子〉の「暮らし」，「育ち」の振る舞いが他と異なることがうかがえる。

図 6 - 8 のように、因子どうしを対応させた形で比較して見ると、図 2 のクラスターの結果で見たプロトタイプとそうではない独自の形態的特徴のある語とに分けられるのが確かめられ、また、それらを分類規定する際の手がかりとして考え得る可能性のある因子の存在が確認できる。また、因子 1 から因子 4 は、共通して、形態的に名詞としての性質が濃い振る舞いをするにより独自性が確認できる。すると、名詞性の高さを示す振る舞いが文中での形態にどのように表われるのかを明確にしていけば、1つのグループの形態的特徴を示すことができるのではないかと

16

以上のいくつかの探索の結果、転成名詞の 1 語前に名詞が前に来ている複合名詞の振る舞いが特徴的だと考えられたことから、目的変数を「前-名/複」、

表3：重回帰分析結果

	平方和	自由度	不偏分散	F検定値
全変動	2.8343E+06	34		74.4005
回帰変動	2.8343E+06	24	117439.14	確率値
残差変動	15784.72	10	117439.14	0.0000

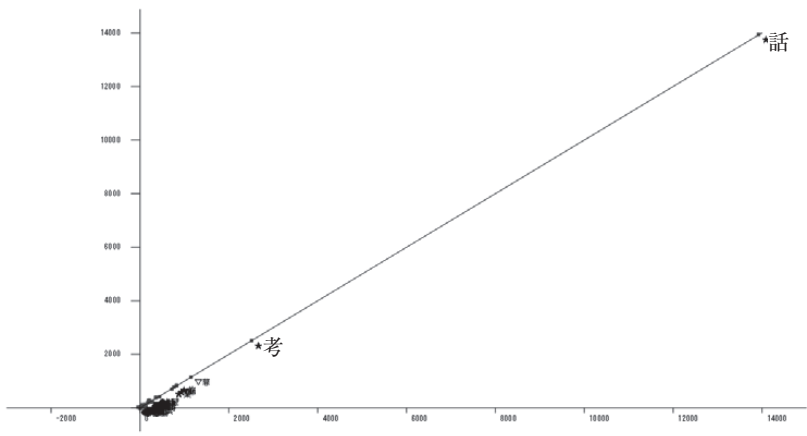


図9：前-名複：重回帰・実測／予測散布図（実・予測値417,294）

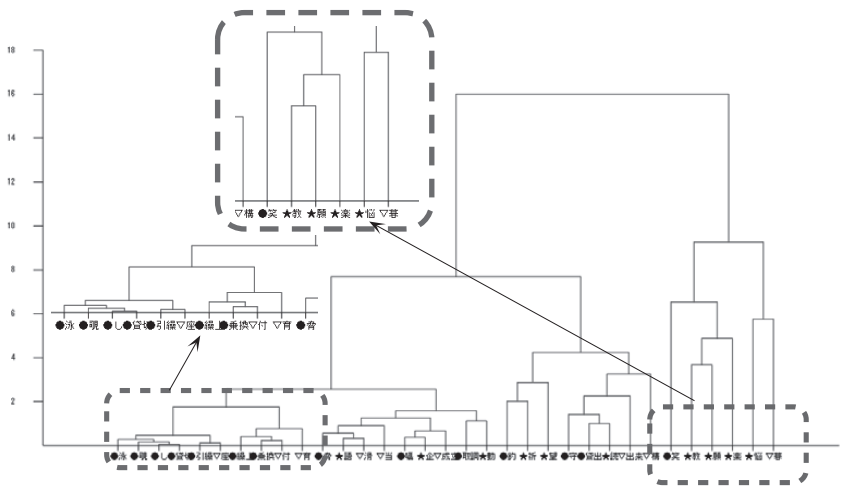


図10：特異な語（★話★考え▽暮らし）を除いたクラスター結果

説明変数を「前-の, 前-い形容詞, 前-ない, 前-V, 前-V-た/(だ)った, 前-連体詞, 前-で, 前-と, 前-から, 前-より, 後-の, 後-が, 後-に, 後-を, 後-で, 後-係, 後-へ, 後-から, 後-まで, 後-より, 後-副助接尾, 後-コピ助動, 後-か, 後-と」として, 重回帰分析を行ってみた(図9)。

重回帰式は, $\text{前-名/複} = 0.0683 * \text{前-の} - 10.8195 * \text{前-い形容詞} + 11.4647 * \text{前-ない} - 0.0209 * \text{前-V} + 7.7199 * \text{前-V-た/(だ)った} - 1.3762 * \text{前-連体詞} + 2.5754 * \text{前-で} + 3.5138 * \text{前-と} - 7.7437 * \text{前-から} + 21.7084 * \text{前-より} + 0.9933 * \text{後-の} - 1.2519 * \text{後-が} + 0.4293 * \text{後-に} - 0.1363 * \text{後-を} - 3.4129 * \text{後-で} + 0.4818 * \text{後-係} - 16.8978 * \text{後-へ} + 2.1497 * \text{後-から} + 35.0354 * \text{後-まで} + 74.5715 * \text{後-より} - 2.0909 * \text{後-副助接尾} + 0.1536 * \text{後-コピ助動} + 18.8934 * \text{後-か} - 2.9925 * \text{後-と} + 31.2404$ となり, 寄与率0.99443, 重相関係数0.99721, 自由度調整済み0.99049であった(表3: 残差正規性のSW検定確率 0.5549, 残差の正規性あり 重回帰式の検定利用可能 重回帰式の有効性の検定: F検定値74.40051, 自由度24, 10, 確率値0.00000, 重回帰式は有効 AIC 363.23, DW比1.9669)。

重回帰の結果をふまえて, 変数から, 図9で見られた特定の形態で使用される独自の転成名詞, すなわち, 〈b.動作・作用内容〉の「話」「考え」と, 〈c.動作・作用様子〉の「暮らし」を除いて再度, クラスタ分析にかけてみると, 図10のクラスタ図のようになった。左端がプロトタイプ的で, 使用形態が類似していそうなものだと考えると, 右端にあるものは, 〈a.動作・作用〉の「泳ぎ」「覗き」「しくじり」「貸し切り」「引っ手繰り」と, 〈c.動作・作用様子〉の「座り」であった。これらは, 上のいくつかの分析でも, 特徴的にその独自性が見られる形態で使用されると考えられた転成名詞である。ただし, 〈b.動作・作用内容〉の「悩み」「楽しみ」「願い」「教え」と, 〈a.動作・作用〉の「笑い」という, 上で行った分析の際には際立って独自性が見られなかったものも含まれていた。これらも, 構文上, 名詞性の高い形態的特徴が見られる語だと考えられるが, さらに詳細な検証の後で考えた方がよいだろう。

18

5. まとめ

以上, 探索的ではあるが, いくつかの分析を重ねてみていくことで, 転成名

詞の構文上の特徴として、名詞としての振る舞いが影響している点が中尾（2017）より少しは具体的に確かめられた。中尾（2017）で指摘したように、転成名詞には、やはり、動詞としての振る舞いと名詞としての振る舞いが形態的な差として見られる場合があること、使用形態の頻度から、使用傾向と意味分野別の傾向がある程度推測できることが確認できたことは、今後の調査継続上、興味深い示唆が得られたと言える。

さらに、形態的な振る舞いが独特であるもののうち、意味上の区別でも同グループに分けられている転成名詞もあることから、転成名詞の意味と、使用上の形態にはある程度の関連性がうかがえ、使用形態には、個々の語を特徴づける傾向があることが確認できた。

ただし、本稿での考察は、まだ、ごく限られた形態面からの分析を試みた程度で、一般化するまでにはより詳細な分析を考える必要があり、また、その手法、方法上の工夫も考えていかなければならない。中尾（2017）でも指摘したが、形態的な特徴が、1つの明確な傾向としてではなく、複数の条件が重なった形で現われることも考えられるため、今回のように転成名詞の前後1語の形式的要素だけではなく、2-3語の組合せでも検証を行い、さらに、各グループ内の意味分類とも合わせて関係する特定できるか試みる必要がある。

今後、さらに、詳細な検証を続けることにより、初中級以上の日本語学習者に、使用上の注意をリスト化するなどの方法で有益な情報を与えられるよう、ケース、変数の取り上げ方を工夫すること、また、意味分野の語を増やして同様の検証を行った上で、別の意味分野の傾向との比較を通して、各意味分野の特徴として現れてくる使用形態についての概要をまとめ、抽象化、ならびに、一般化して、意味分野別、形態別リスト化を行ってみたい。今後の課題は多い。

参考文献

- Ant Conc : <http://www.laurenceanthony.net/software.html>
 BCCWJ : http://pj.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/
 College Analysis : <http://www.heisei-u.ac.jp/ba/fukui/analysis.html>
 石川慎一郎・前田忠彦・山崎誠（2010）『言語研究のための統計入門』三省堂。
 奥津敬一郎（1974）「複合名詞の生成文法」『国語学』101, 48-34.

- 加藤弘 (1987) 「転成名詞について」『日本語学校論集』, 14, 49-67, 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校.
- 金姜淑 (2003) 「連用形名詞」『日本語論究』, 7, 299-320, 和泉書院.
- 佐藤佑 (2012) 「『太陽コーパス』にみる, 動詞性名詞「報告」の使用実態」『第2回コーパス日本語学ワークショップ予稿集』, 77-86.
- 鈴木重幸 (1964) 『語彙教育』 麦書房.
- 寺村秀夫 (1990) 『外国人学習者の日本語誤用例集』 (大阪大学; データベース版, 国立国語研究所, 2011年).
- 中尾桂子 (2017) 「使用形態別使用頻度に基づく転成名詞の意味分類一考—「動作・作用のありさまなど」を表す5動詞の場合—」『大妻女子大学紀要—文系—』 49号1-21 (199-178).
- 西尾寅弥 (1961) 「動詞連用形の名詞に関する一考察」『国語学』 43, 60-81.
- 松村一登 (2003) 「転成名詞の意味の類型」 <http://www.kmatsum.info/lec/meziro/morphology/wordformation2.htm> (2015.12訪問).
- 村木新次郎 (1981) 『日本語動詞の諸相』 ひつじ書房.
- 山田孝雄 (1936) 『日本文法学概論』 宝文館.
- 山本清隆 (1983) 「転成名詞の語彙的展開」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究』 (情報処理振興事業協会), 12.

添付資料

松村一登講義資料 (言語学概論, 形態論の資料) より

<http://www.kmatsum.info/lec/meziro/morphology/wordformation2.html> (2015.12訪問)

転成名詞の意味の類型

1. 動作・作用など

- a. 動作・作用そのもの (～スルコト) 15
泳ぎ, 釣り, 笑い, のぞき, 揺れ, 守り, おどし, ささやき, しくじり, ひったくり, 取り調べ, 貸し出し, 貸しきり, 繰り上げ, 乗り換え
- b. 動作・作用の内容12
考え, 教え, 読み, 話, 語り, 望み, 楽しみ, たくらみ, 願い, 悩み, 祈り, 勤め
- c. 動作・作用のありさま・方法・程度・具合・感じなど9
暮らし, 構え, 育ち, 成り立ち, 付き (が回ってくる), 滑り (がいい), すわり (が悪い), 出来 (がいい), 当たり (が柔らかい)

2. 動作・作用の所産・結果

- a. 他動詞から
写し, 控え (をとる), 包み, 貯え, 稼ぎ, もうけ, 見積み, きざみ (たばこ), 握り (寿司), ちらし (を配る), 借り/貸し (がある),

- 彫り、飾り、おろし、盛り（そば）、（鯨の）開き、（鯉の）たたき、煮込み、差し入れ、書き置き、書き下ろし、盛り合わせ、綴じ込み、割り当て
- b. 自動詞から
 （落語の）落ち、余り、残り、固まり、聞こえ、響き、氷、しみ（染）、はげ、腫れ、（肌の）荒れ、へこみ、ゆがみ、破れ、ひび割れ、むくみ、かぶれ、吹きこぼれ、ほころび、よごれ、誤り、狂い（がない）、へだたり、ずれ、違い、入り（が悪い）
3. 動作・作用の主体
- a. 人をあらわす
 忍び、もぐり、迎え、（落語の）取り、見張り、見習い、手伝い、付き添い、取り巻き、呼び出し（相撲）、飛び入り、跳ねっ返り、欲張り
- b. 人以外
 流れ、群れ、妨げ、支え、浮き、代わり、続き、つぼみ、しがらみ、おまもり、お化け、生まれ変わり
4. 動作・作用の受け手
 つまみ、開き、引き出し、引っかけり、ねじ、合わせ、まわし、まとい、重ね、連れ、連れ合い、たより（にする）
5. 動作・作用の手段・道具
 はかり、はたき、はさみ、ふるい、つなぎ、しぼり（カメラ）、こやし、せき（堰、閘）、囲い、おはらい、お用い、おひろめ、（お）祭り
6. 動作・作用の行なわれる場所
 （文の）はじめ／終わり、通り、渡し、（町の）はずれ、（地の）果て、とまり（宿、港）、張り出し（窓）、受け付け、（台所の）流し、まわり、振り出し（すごろく）、書き出し、並び（にある）、かくし（ポケット）
7. 動作・作用の行なわれる時間
 暮れ、始まり／終わり、行き／帰り、休み、締め切り、はね（終演）、（彼岸の）入り、お開き